

## 病害虫発生予察特殊報 第7号

作物名：セルリー  
病名：セルリー萎縮炭疽病（仮称）  
病原菌：*Colletotrichum simmondsii*

### 1 発生確認経過

数年前から中信地方のセルリー栽培ほ場において、既知の病害とは異なる芯葉部位に激しいえそ斑が生じ、奇形を伴う病害が発生していた。

県野菜花き試験場で病原菌を分離し、分離菌の形態調査を行うとともに、独立行政法人農業生物資源研究所と共同で遺伝子解析を行ったところ、*Colletotrichum simmondsii*によるセルリーの新病害、萎縮炭疽病（仮称）であることが判明した。

本病原菌と類縁関係にある*C. acutatum*による「セルリー炭疽病」は、平成12年に東京都から発生が報告されているが、本県で発生した被害株の病徴とは大きく異なる。

### 2 病徴及び被害

本病は主に夏秋作型（施設栽培）で発生が多く、芯葉に激しく生じる細かいえそ斑点と葉の奇形、カールが特徴的である（図1, 2）。

発生は通常9月中旬頃に初発が確認され、収穫期に近づくると萎縮、矮化などの概観上明らかな生育異常株が散在する（図3）。

なお、セルリーの外葉や展開葉に、斑点性もしくは黄化する地上部病害として、斑点病、葉枯病、CMVによるモザイク病が確認されているが、これらは本病の病徴とは明らかに異なる。

### 3 病原菌と発生生態

(1) 本病原菌は被害残渣とともに土壤中越冬し、翌年の伝染源となる。灌水時の土壌の跳ね上がりにより、植物体に菌が付着し感染する。

(2) 本菌はセリ科以外の作物に対する感染性は明らかではないが、国内ではピーマン炭疽病病原菌の一つとして報告されている。

また海外では類縁の*Colletotrichum acutatum*と同様に比較的多犯性とされていることから、ほ場外からの伝染に注意する。

(3) 本菌の生育適温は比較的高温であり、真夏を経る作期において発病しやすい傾向があることから、盛夏期に定植する作型においては充分注意する。

### 4 防除対策

(1) 現在のところ、本病を対象とする登録農薬はない。

(2) 発病株は見つけ次第ほ場外に持ち出し処分する。

(3) 敷きわらやポリマルチ等により、土壌の跳ね上がりを防ぐ。



図1 芯葉部位の萎縮



図2 葉の細かいいそそ斑



図3 散在する発病株

長野県病害虫防除所  
所長：宮島明博  
担当：武井正明  
TEL：026-248-6471（直通）  
FAX：026-248-6473  
E-mail：bojo@pref.nagano.lg.jp